

# 審査員コメント



デザイナー  
川上テザンルーム代表

## 川上 二元美氏

これほどユニークなコンペは他に類をみない。地方の共同体の弱体化は、地方文化の荒廃をも招きかねないのだが、こと宮崎の杉をテーマの町おこしはどうか。宮崎木青連の強靱な連携と一途な志が、かくも盛り上げていくかと感服するのである。今年も昨年の東北支援の縁による、岩手県野田村の子供たちの参加、村長さんまで出席という盛り上がりかたであった。

子供達のイメージ豊かな発想とスケッチその思いをしっかりと主張できる発表能力は素晴らしい。そしてその思いをしっかりと受け止めて具現化した木青会の作り手の仕事に拍手を送りたい。かわいらしくも、みごとなスケッチを受け止めてそれを具現化した事だ。なかでも「天空のやたい」のうづくりを施したその味わいは絶品であった。

一般の部は、屋台のテーマでひととき盛り上がった。「ひとりじゃヤタイ!」まさしく様々なシーンに大勢が集まって絆を育むコミュニケーション装置のかずかず、グラブに輝いた「屋台骨はまさに骨格もしっかりして、秀逸であった。

デザイナー  
南雲デザイン事務所代表

## 南雲 勝志氏

杉コレの目的は宮崎県木材関係者の意識向上とブランド向上にあると思っっている。宮崎各地を巡りながら、楽しさを追求し続けたその体勢は徐々に整ってきた。後ろから頑張れと背中を押していたのは都城のあたりまでで、以後自分達でしか出来ないものを作る楽しみ、多くの人に

そのほかの入賞作品についても、それぞれ個性にあふれ想像力に満ちたすばらしい作品だったと思います。

今回は、東日本被災地支援部門で、岩手県野田村から小田村長さんにもおいでいただき、子供たちからも作品を3点出展していただきました。「やたい」を通して「森の楽園」「絆」「活力」を自然と感じさせる表現力に満ちた作品となっており、未曾有の災害から立ち直りつつある東北の方たちの笑顔が形に現れていることを強く感じる事ができました。今後の更なる復興を心から願っております。

宮崎市は、地域の約55%を森林が占めており、人工林のほとんどが杉です。今回の「杉コレクション2012」を機会に、杉の持つ温かさや癒し効果など、杉の良さを広く市民の皆様へアピールしていきたいと考えております。

最後になりましたが、今回の「杉コレクション2012」の開催にご尽力された関係者の皆様に対しまして感謝申し上げますとともに、これを機に、今後ますます木材産業全体の活性化が図られますようお願い申し上げます。



見て貰う楽しみを知り、今年の開催はちょっとしたお祭りのような素晴らしいムードであった。

そして同時にものづくりから人の繋がりをへと発展して行く。応募者と製作者のコラボレーションやプレゼンテーションに加え、昨年からスタートした子供杉コレの小さな発想さらにそれを加速させた。東北の子供達への気持ちを込めた「だっこの椅子」は多くの人々を巻き込むプロジェクトとなり、今年の野田村子供部門の開催、さらに2012年度グッドデザイン賞を得るに至った。

宮崎発の杉コレは徹底的にオリジナリティを追求した結果、知らず知らずのうちに明確なアイデンティティを持ち、今や宮崎流、木青会流の意志を全国へ発信し始めたのだ。来年の延岡開催で9回目となる杉コレはそろそろ宮崎の伝統行事と言われるかも知れない。

## 中村 武史氏

株式会社内田洋行  
マーケティング本部副部長

「杉コレクション2012 in 宮崎」のご盛會を心よりお慶び申し上げます。あいにくの雨模様でしたが、杉コレに関わる全員が元氣と熱氣で寒さも忘れ楽しいひと時を過ごすことができました。今年は昨年の子ども杉コレグランプリ「だっこのいす」を贈った岩手県野田村の小田村長と子どもたちとお母様方が参加され、杉コレがつないだ「絆」を感じるとともに、野田村の皆さんの元氣で前向きな姿に力強さを感じたのは、恐らく私だけではないと思います。作品については、子どもたちの溢れんばかりの創造力、一般部門のテーマ性と

## 松永 裕文氏

フエニックスシーガイアリゾート  
代表取締役CFO(最高財務責任者)

子供の部では、言葉ではなく作品を通じて野田村の子供たちと宮崎の子供たちが一つのテーマを共有し、同じ場所へ出会えたことに、この杉コレの価値を感じる事が出来たと思います。またそれぞれの作品は伸び伸びとした豊富な内容で、大人が忘れていた発想が随所に見られました。

一般部門では、テーマの捉え方がどれもユニークで、関係者、審査員、通行人の皆さんを和ませ、会場を「皆が笑顔になれる場所」にできた事は、大成功だったと思います。また今年は韓国からの参加がありました。今後海外からの参加が高まることにも期待したいと考えます。

最近シーガイアにおいても、杉を取り入れた装飾や施設の改装を行い、宮崎が誇る杉の良さをお客様にもご紹介しています。今回人間の思いと杉の温かさ、柔らかさが融合した素晴らしい作品に触れることができ、私自身杉の魅力を再認識しました。また作者の思いと細やかな感情を杉に表現された木青会のメンバーの作品は秀逸で、その技術、努力にはただ感服しませんでした。

今回の杉コレをこのような成功に導いた関係者の皆様に敬意を表しますと共に、第9回の成功をお祈りしたいと思います。フエニックスシーガイア・リゾートとして、これからもこの杉コレに参加し後援したいと思っております。

緻密な設計、そして高い完成度で仕上げられた作品に沢山の刺激、感心、温かさを与えて頂きました。内田洋行賞を受賞された「みんなでヤタイ」一本杉支え愛は、今回の作品テーマ「ひとりじゃヤタイ!」に対して、直球と真ん中を熱く魂を込めて投げ込まれたような堂々とした作品でした。チーム菊池の皆さん、改めておめでとうございました!

## 堀野 誠氏

宮崎県環境森林部長

今年の杉コレクションのメインテーマは「みんなが笑顔になれる場所」、作品テーマは「ひとりじゃ、ヤタイ!」でした。

宮崎市の中心市街地に軒を並べた「ヤタイ」は、子ども達の真っ直ぐな気持ちを表現したもので、作者の強い思いが込められた独創的な作品ばかりで、「天空のやたい」、「屋台骨」、「みんなでヤタイ」一本杉支え愛など、すべてが「みんなが笑顔になれる場所」であったと思います。

また、昨年の杉コレ作品である「だっこのいす」を寄贈した岩手県野田村から子ども部門へ多数応募いただいたうえで、野田村村長ほか入賞された3人の児童の皆さんをお招きできたことは、人と人の繋がりのすばらしさを改めて感じたところででした。

当日は、天候が悪く、審査会場がアーケード内で狭いのではという不安もありましたが、その狭さが返って作者、審査員、来場者の距離を縮め、体感が生まれ大盛況の最終選考会になったと思います。

次回9目を迎える杉コレクションが、今後、どのように発展し私達を楽しませてくれるのか、今から期待しています。

## 内田 みえ氏

建築・インテリア専門誌  
「コンフォルト」エディター

はじけるような笑い顔に溢れた最終選考会。これぞ杉コレと言わしめる、とても楽しいものでした。「ひとりじゃヤタイ!」というテーマも功を奏しましたね。屋台という多くの人が集える移動装置を、軽くて柔らかな杉でどう表現するかももちろん、愉快なデザインでどこまで人を笑顔にできるかが杉コレでは重要なポイントです。

原寸大で製作された8作品はいずれもジョークに富んだもので、中でも内田洋行賞受賞「みんなでヤタイ」一本杉支え愛は大爆笑。一本脚のテーブルをみんなで支えながら飲むという、なんともばかばかしい案を真剣に懸命にやり遂げるところが杉コレの真骨頂と感じました。

そして、昨年の子ども部門グランプリ「だっこのいす」から繋がった野田村の子供たちの屋台は、胸がきゅつとなるような純真な提案でした。この屋台は野田村に寄贈され、多くの笑顔を生むことと思えます。この一連の動きも、杉コレだからこそ出来たことですね。

8回を重ねてますます杉コレらしさが加速してきたように思います。世の中を明るく楽しくしてくれる杉デザインが、まだまだたくさんあることを予感させてくれた2012年。来年が待ち遠しいです。

## 小田 祐士氏

特別審査委員  
岩手県野田村村長

昨年度の子ども杉コレ部門のグランプリ作品である安田圭沙ちゃんの「だっこの

## 飯村 豊氏

宮崎県木材利用技術センター所長

今年度の作品テーマは「ヤタイ」。昨年のテーマは「座で、静かなイメージの作品が多かったが、今回は動的な印象を与える作品が目立った。どの作品も出来栄が優れており、とても難しい審査となった。

作者と製作者が協同でつくりあげた作品の細部を詳細に見ていくと、作者の意図を汲み上げて製作者がどのような道具類を使って、スギの諸特性を踏まえながら加工していたかがよく分かった。

スギの特性を極めた古くから今に伝わる加工技術に、叩いて潰し、水を掛けて復元させるという、船大工が鉄肥杉に用いた「木殺し」がある。その「木殺し」に通じる技術を使った作品が、子ども杉コレグランプリを獲得した「天空のやたい」だった。大径木の根柢側面にくり抜かれた幹の内部に入って屋台から、木の精に抱かれながら果てし無い天空を見たいという子どもの直感を、製作者も大切にして最高のスギ加工技術で表現した。



「いす」が震災支援として今年の2月に野田村へ寄贈されたのが始まりで、今回、審査員を仰せつかる機会を与えて下さいまして、誠にありがとうございます。

また、宮崎県を始め、全国から温かいご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、今年の杉コレでは、東日本被災地支援部門という特別枠を組んでいたこと、野田村の子どもたちが宮崎の「杉」と触れ合うことができたほか、杉の持つ柔らかさや温かさが、この杉コレを通して、心の温かさまで伝わっているものと実感しました。今後もこのつながりを大事にしていきたいと考えております。

昨年の震災から1年8ヶ月が経過しましたが、現地での被災者再建はまだまだ現実のものとなっておりませんが、今後も皆様のお力添えをいただきながら、1日でも早い復興を目指して頑張っております。

